

いです！」っていう感想を書いてくれてる人もいました。何度も何度も、繰り返^く返し頑張^{かえ}って発表したみなさん、ごころうさん！でも、手に汗かきながら一度も発表できなかったみなさんもいたんですよね～。そんなみなさん！発表回数にこだわる必要はないんじゃないかな？確かにたくさん発表できた方が活気^{かっき}が出て楽しい授業になると思います。

「全体学習、みんなで思ったことを聞き合^{かい}って、会話^わになる。それが授業！大切ですね。」こう感想に書いてくれてる人もいました。でも、発表できなかった人の中に、一生懸命だった人も必ずいるはずです。そんな頑張りも同じように認められるとステキだなと思うんです。みんなの意見を聞くだけでも勉強になるもんね！

そして、先日行われた「3年生を送る会」(2月22日)では、「一人芝居『花火』」を、さくらホールで観ました。やっぱりホンモノの芝居^{はくろく}の迫^{はく}力はすごかったようで、たくさんの人が次のような表現で感想を書いてくれました。

「一人芝居を見ていると、だんだん物語の中にいるような感じになってきた。たった一人で芝居しているのに、何人もいるように思えた。たった一人でも、客を物語に引き込むことができるんだなあと非常に感動した。」

「背景^{はいけい}を変えずに、そのまま学校に見せたり、公園に見せたりとびっくりしました。」

「本当に哲男やあかねが目^めの前^{まへ}にいるようで、クギツケになってしまいました。」

「一つ一つの動作や言葉で、そこに人が見えてきました。『すごい!!』って思いました。」

また、最後^{おと}に踊^{かんこく}った韓国・朝^{ちようせん}鮮の踊^{はんのう}りに、中学生のみなさんがどんな反応^{はんのう}をするのか気になったのですが、それも結構好^{けっこうこうひよう}評^{ひよう}だったようです。

「最後に踊^{じようず}った朝鮮の踊^{じようず}りも、きれくて上手でした。」

「一番すごいと思ったのは、最後の踊^{さいわ}りでした。」

「見て楽しかったところ、それはやっぱりラストの踊^{さいわ}りだと思う。あの踊^{さいわ}りにひかれるものがあった。やさしさがあって、あたたかみもある踊^{さいわ}りだなあと思った。」

劇を観る前、私は「ちゃんと観れるかな？騒^{さわ}いだりしないかな？退屈^{たいくつ}そうにしたりしないかな？」と心配してないわけではありませんでした。でも私が思ってるより、中学生のみなさんの感性^{かんせい}は本当に豊^{ゆた}かで、私の不安^{いっき}は一気^ふに吹き飛^とんでしまいました。湧^わく場面^{かんせい}では歓声^{かんせい}があがり、しみりする場面では耳^{みみ}を澄^すまし、感動^{きんどう}的なシーンでは自然^{しぜん}と拍手^{はくしゅ}が起こり、舞台^{たい}と客席^{きやくせき}が一体化^{いつたい}しているようでした。まるで充^{じゆう}実^{じつ}しているときの全体学習^{しんがく}のようでもありました。みなさんのこと、信^{しん}じてなかったわけではないんだけど、やっぱりどこかで信^{しん}じてなかったのかな……。みんな、ゴメンね！全体的な感想文^{かんさうぶん}を三つほど紹介します！

テーマがとても深かったように思います。「いじめ」から始まった劇。最初はいつも通りに「いじめはいけない」とか言って終わると思っていました。でも、それが「障害者差別」「民族差別」へと移^{うつ}り変わっていき、人の心の暗い部分^{くろいぶぶん}が浮き出てきました。一人の少女を通して、一人の男の子の優^{やさ}しさなどを見つけた先生。初めて真剣に生徒と

んな差別に負けるな！人間はみんな平等なんだ！」って言ったところで、私はまた一つの部落差別がなくなったと思いました。

私は一人芝居を見て、「北から南、東から西の全国の人たちがこの芝居を見ると差別がなくなる日は近くなる」と思いました。私は、また一人芝居を見たいと思いました。

実は感想文を読む中で、「まだこんな部落差別が残っているとは知りませんでした」といった内容のものがいくつか見受けられました。私は、「アレッ？」と思いました。教室やこのマイスカイでも、実際に起こった、また起こされている部落差別について学習していたと思ひ込んでいたからです。やっている側(マイスカイを書いている私のような側)はやるつもりでも、受けている側が「やった」と思わなければ、「やってない」ことと同じです。ちょっとショックでした。もっと思いが伝わるように、努力・改善していきます。

でも、中には自分のこととして、自分の身近な問題として考えられ、これからどうするべきかを考えようとしているみなさんもいたようです。

「この芝居を見ていてドキッとしたとこがあった。それは結婚差別や部落差別。今までいっぱい学習してきたけど、いつも軽い気持ちでしか考えてなかった。花火の両親が花火のためを思って相手と花火を引き離れたシーンは、ちいと考えた。もし自分が母親だったらそうしたかもしれないからだ。今はもう差別が昔ほど残ってないというけれど、やっぱり『部落という肩書きで花火の人生を変えてしまうかもしれない』という親の気持ちも分かる気がする。でも、私が花火の立場だったら、花火のように相手を捜して追いかけてくと思う。まあ差別がなくなればいいことなんやけど。それをなくすために、私ができることをしたいと思う。」

「……特に花火の結婚差別は、私も経験するような問題だったので、すごい分かる気がしました。」

「……実は一人芝居を見る前日に、親戚のお姉ちゃんと結婚について話しました。そのお姉ちゃんは結婚を考えていて、親に言うのと部落のことが出てきたそうです。相手が部落かどうか分からないけど、部落だったら反対はしないけどいい気はしないようだったそうです。こういうことがあったから、見ていてすごく身近なことだと思いました。将来は自分の問題になるかもしれないから、真剣に考えていこうと思います。」

実はこのお正月、私も身につまされるような思いをしました。お正月に卒業生と集まり、飲みに行ってた時のことです。中学時代に同和教育・部落問題学習を通して「人としてどう生きるべきか」を問い続けた仲間たちでした。その精神は卒業式にも引き継がれ、大変感動的な別れをした仲間たちでした。いろんな話に花が咲き、今どう暮らしてるのか、何を考え生きているのか語り合うことができ、すごく充実した時間を過ごすことができました。

時は過ぎ、一軒め、二軒めと場所を変えていく中で、三軒め(時間はもうとつくに午前0時をまわっていました)で、ある卒業生がこんな話をしてくれました。

「先生、中学時代のオレは、全体学習にも部落問題学習にもずいぶん消極的やった。みんな

が話しよるときも、『こんな^{うそ}嘘じゃ。みんななんやかや言うても、自分のことは^{たな}欄にあげて、部落のことはどこか遠い^{うそ}ことのように話しよる。』とずっと思ってた。高校時代に部落差別に出会ったこともなかったし、大学で^{けんがい}県外に行くことになった時も、部落差別に出会うことはないと思ってた。けどな、大学に行って初めて二回部落差別にあったんよ。」

彼は突然^{とつぜん}、でも「実は^{じつ}今日はこの話をしに来たんだ」という決意^{けつ い}を抱いて来たかのように、^{まえ}前のめりになり、私に^く食い入るように話し始めました。周りで^{くかん}されている会話は、遠くから聞こえてくる^{げしゆく}雑音のようで、そこだけ別の空間であるかのようにでした。

「一回めは下宿のおばさん^{おば}やった。下宿^{で い}近くに出入りしている人たちを指して、『あの人たちとは関わらん^{かか}といった方がええよ。あの人たちは生まれが違うから』って言ったんよ。その時、ピンときた。『あっ、これが部落差別なんじゃ』って。けどな、ほの時は何も言えんかったんよ。悔しい^{くや}思いはあったし、何か言わな^なあかんと思っただけど、何も言えんかった。情けな^{なさ}あて、下宿に帰ってからもずっとほのことばかり考えた。親の顔が浮かんだ。友達^{ともだち}の顔が浮かんだ。けど、このことは絶対誰にも言うまいと思っただ。」

彼の目線^{め せん}は落ちていました。

「二回めは後輩^{こうはい}やった。オレの下宿に一人の後輩^{おぼ}が遊びに来て、どうい^{おぼ}う話の流れか覚えてないけど、なぜか部落の話になったんよ。そしたらほいつ、無茶苦茶な^{む ちゃ ぐ ちゃ}こと言い出して……。ほんま部落の人間は人間でないみたいに言うんよ。『部落の人間^{ちが}の血は違う』とか言い出して。オレもうたまらんで、いきなり立ちあがって台所^{だいどころ}行ったんよ。包^{ほうちよう}丁取り出してそいつの目の前で、『これでオレの血見せたるか。オレもほうじゃ。部落の人間じゃ。他のヤツらと何が違うんな。どこが違うんな』ってやってもたんよ。ほの後何話したかよう覚えてないけど、とにかく^{ひっし}必死になって話したんよ。そいつ、最後^{あやま}には謝^{あやま}り^{あやま}り^{あやま}った。ほんまに分かったかどうかはわからんけど……。」

「悔しい」言葉にすればだった三文字ですが、その言葉の奥^{おく}にどれほどたくさんの思いがこもっているか。その悔しさが、彼の身体^{からだ}からにじみ出ていました。私自身も、あまりの悔しさにやりきれない気持ちでいっぱいでした。暴れたいけど暴れたところで何にもならない。誰かに^{すく}言^いって救われるわけでもない。ただただ、私がやってきた部落問題学習^{ふじゅうおん}の不十分さを責めるしかありませんでした。けど、彼はこうつけ加えました。

「オレ、もっと中学校で^{しんけん}真剣にやとつたらよかった。けど、一回めは何も言えんかったけど、二回めに^{き ぜん}ちょっとでも言えてよかったと思うとんよ。成^{せい}長^{ちよう}した^{ちよう}だろー。」

彼のこの毅然とした姿勢に、私自身救われた気がしました。自分自身を無理^{むり}して奮^{ふる}いたさせているのかもしれない。けど、その表^{ひようじよう}情^{じよう}は話し始めた頃^{ころ}とは明らかに違い、どこか晴れ晴れとしているように感じられました。今まで誰かに言いたかったことがやっと言えたという爽やかさ。部落のことについて正^{しょうめん}面^{めん}から話せる安心感。そんなものを感じたのです。

しかしまた、彼は今の仕事についてこうも話しました。

「今仕事で^{えいぎよう}営業のようなことしているけど、担当^{たんとう}になっているところに部落がある。一部に^し支

はら
払いをしてもらえないところもある。オレらの生活の中にあるしんどさが分かるだけに、オレもしんどい。オレらがもっとシャンとしていかなあかんと思う。親がシャンとできんのに、子どもがシャンとできるはずがない。」

「お前がそう言うのは構わん。けど、部落問題を知らずにその言葉を吐くヤツもおる。ワイはそれが許せん。特にワイら教員も含めて、公務員には差別をなくしていく義務と責任がある。そのことを十分分かってないままで、部落の悪口や悪いイメージを広めるヤツも中にはおる。いろんな考え方があっていいけど、差別をなくさなあかんということを放ったらかしにしたらあかん。それと、同じ部落の者を悪く言うたらあかん。シャンとできん理由が、お前には分らんワケではないだろう。誰でもシャンとできるもんならしたいと思うとる。ただ、生い立ちの中で部落差別にドツプリつけられ、シャンとしたくてもできんかった思いを担いでいかなあかん。その人やその人の生き様から、いろんなことを学びとっていかなあかんのやと思う。その経験が、自分の人生を豊かにしてくれるんでないか。学ぶっていうことは、自分を豊かにするっていうことや。そう思ったら、その人に感謝こそすれ、責めることはないだろう。人を責めることの愚かさ気づいていくハズや。いざとなったら差別を受けるんは一緒やないか。一緒に手を組んでいかな。何が違う。どこが違う。みんな一緒の人間やないか。」

私はこの言葉を吐いているうちに、彼に言っているのではなく、自分自身に言い聞かせているような錯覚を感じました。私もまだまだ発展途上の人間です。完成されたわけでもないし、いつ完成されるか分かりません。死ぬまで完成されないんじゃないかとすら思っています。だからこそ、日々学びであり、日々成長なんだと思えるのです。

さてここで、各高校で同和教育・部落問題を学べる活動を紹介しておきます。高校では、小学校・中学校のように、毎週部落問題学習があるわけではありません。年に数回くらいのもので、先ほど言ったように、同和教育はいつまでも学びであり、一生その学びが尽きることはありません。つまり、せっかく関心が湧いてきた人も、中学校でその関心が途切れてしまうかもしれないのです。個人的に学んでいってもいいのですが、それではどうしても視野が狭くなったり、ある方向に偏ったりするかもしれません。そのためにも、高校で板中の生徒会人権委員会にあたる生徒会活動や、人権部にあたる課外活動(下表)に参加してみはどうでしょうか。きっとこれからのみなさんの人生にプラスになると思いますよ！

城 東	ノウ・サークル	徳島中央校	T 9 C (火曜9時の会)
城 南	ヒューマン・ライツ	鳴 門	部落問題研究部[ヒューマンネットワーク]
城 北	社会問題研究会	鳴門第一	社会問題研究部
城ノ内	解放研「レベラズ」	鳴門工業	社会問題研究部
徳島北	人権部	板 野	愛真会
城 西	社会問題研究部・部落問題研究会	名 西	部落問題研究会
徳島工業	解放研究会	阿 波	社会問題研究会

徳島東工業	同和問題研究会	阿波農	解放研「リバティ」
徳島商業	生徒同和教育推進委員会	生 光	人権委員会

いよいよここからは、私たち同教団からの最後のメッセージです。

3年生のみなさん、ご卒業おめでとうございます！みなさんとの付き合いは2年前の春からで、たくさんの思い出をみなさんからもらいました。教師としてもまだまだ若く未熟者の私にとって、みなさんと過ごした時間はとても貴重で欠けがえのないものでした。学習会で真剣に同和問題に取り組んでいた姿、受験勉強を懸命に頑張っていた姿、部活で一生懸命に汗を流していた姿、全体学習で自分の思いを語っていた姿など、みなさんの輝いているシーンが次々と頭に浮かんできます。みなさんの人生はこれからです。これからもどんどん輝きを増していって下さい。私自身これからも、みなさんに負けないように成長していきたいと思います。本当に今まで楽しかったです。お互い輝いている人間になりましょう。

学習会専任指導員 赤澤 健志

私が、板野中学校に勤務してはや一年が過ぎようとしています。そして、アッという間の一年だったと思います。三年生の人もう卒業ですね。中学生活はどうでしたか？楽しかったですか？思い出はたくさんできましたか？私はみんなといっしょに学習会で、勉強したり、いろいろな話をしたりして思い出がたくさんできました。勉強では教える立場でありながら、逆に私の方が教えられたような気がします。これからそれぞれの高校に進んで行くと思いますが、中学校での仲間、また学習会の仲間を大切にしてください。そして、笑える日々を送って下さい。

学習会専任指導員 佐瀧 昭博

ご卒業おめでとうございます。中学校での3年間はどうか？たくさんの思い出ができたことでしょう。その中には、楽しかったこと、面白かったこと、または進路に悩んだことなどもあると思います。そのすべてがみんなを成長させたのではないのでしょうか。一生懸命何かに取り組むという姿が多く見られるようになりました。2月からの学習会延長学習においてもがんばろうという気持ちが伝わってきました。そして、その気持ちを支えたのは、友達存在も大きかったのではないのでしょうか。

これからは、中学校までと違ってそれぞれ自分の選んだ道を歩くことになります。いろいろなことに会おうと思います。もしかしたら、悩むこともあるでしょう。そんなときには、仲間のことや自分が一生懸命がんばったことを思い出してください。きっと力をくれると思います。

自分に自信を持って、がんばってください。

本当に、ご卒業おめでとうございます。

学習会専任指導員 吉田 友里
よしだ ゆうり

私の最後の^{で ばん}出番がきました。卒業生みなさん！卒業おめでとうございます。これまでみなさんは、板野町という、ある意味「^{おんしつ}温室」の中で過ごしてきたのかもしれませんが。

「井の中の蛙 大海を知らず」

この言葉通り、大きな海を知らず、まだまだ広い世界を見ることはなかったのかもしれませんが。みなさんは小さな「蛙^{かわず}（カエルのこと）」だったのかもしれませんが。いえいえ、もしかするとまだ「オタマジャクシ」なのかもしれません。そう思うと、この「蛙」がずいぶん小さくて、^{よわ}ひ弱で、^いかわいそうな生き物のように思えてしまいます。

でも、実はこの言葉には続きがあるというのです。それが、これです。

「されど、^{そら}空の^{あお}青さを^し知る」

確かにまだまだちっぽけな存在^{そんざい}だけど、^{こころざし}「志」は果てしなく大きく、高く、明日という未来^{あす みらい}に向かって、^{かつこ}確固たる自分を持っているという感じがしませんか。そう思うと、今まで^{そうそう}想像していた「蛙」が、とたんに大きく見えてはこないでしょうか。「蛙」のキラリとした目やピンツと張った^{まえあし}前足すら思い浮かべることができます。カッコイイじゃありませんか。今みなさんは、ちょうどそんな姿だと思うのです。確かに世界が広がることで、ずいぶんと苦勞することもあつてでしょう。何度も壁^{かべ}にぶち当たり、へこんでしまうこともあるかもしれませんが。でも、みなさんにはこの町があります。この板野中学校があります。しんどくなったら帰ってくるところがあります。しんどくなったらいつでも帰ってきてください。そしてエネルギー^{えんるぎ}をたくわえ、また世界に飛び出していけばいいんです。そしていつか、その苦勞すら喜びや楽しみに変えられるよう、^{みずか}「自ら」の意志^{いし}で^{あゆ}歩いていってください。

^{ざいこうせい}在校生のみなさんも卒業生同様、新年度、それぞれの未来に向かって頑張ってください。私も、さらなる^{しんか}進化^とを遂げるべく頑張ります。

それぞれの頭上^{ずじょう}に広がり、どこかで必ず^{かなら}つながってる、この青空のもとで……。



■今年一年、思いつくままに、いろんなことをこの

マイスカイにとりあげ記してきました。それも今回でおいしいです。まだまだすべてを伝えきれませんが、「少しでも」と思い^{つづ}綴ってきたように思います。私からの^{いっぼうてき}一方的な「思いの押しつけ(?)」を、一年間「快^{こころよ}く読んでいただき、本当にありがとうございました。

■掲載^{けいさい}した中で、心に留めておいてほしいことを取^あえてあげるなら、やはり「狭山事件^{きやま じけん}」でしょうか。部落差別^{えんざい}による冤罪^{えんざい}だと言われています。今もなおその罪が晴れることはありません。その思いの一端^{いったん}を、本人である石川一雄^{いしかわ ひとし}さんと、その妻である早智子^{さちこ}さん(徳島出身)が綴^{つづ}った文章から感じ取ってください。

新 春に 躓き再度のスタートも 砂漠の司法に厚き壁求む

2002年2月20日 石川 一雄

闘いの場は最高裁・最高検に

1月29日、特別抗告を申し立て、闘いの場は最高裁、最高検になりました。東京高裁では、高木裁判長に再審を棄却され、高橋裁判長に異議申し立てを棄却されました。

何度も何度も司法権力に裏切られ続けながらも真実は必ず明らかになることを信じ、闘い続けてきました。一雄さんは63歳になりました。狭山にいるときはほとんど毎日ジョギングをしています、自分の体力が毎年確実に落ちていることをジョギングのタイムで感じています。

1月29日の異議審棄却緊急抗議集会での一雄さんの発言は、「私はこれから何十年も生きようと思う。生きなければならない。冤罪が晴れるまで何十年かかっても闘いぬく」と不退転の決意を述べました。

このようにいつも前向きな生き方をしている一雄さんが先日「自分の生きている間に冤罪が晴れるだろうか」と話しました。一瞬返事に詰まりましたが「大丈夫だよ」と答えました。一雄さんにとって『時間』との勝負と感じたのでしょうか。健康に気をつけ「長生きをする」ことが一つの闘いでもある一雄さんから私が初めて聞いた言葉でした。

一雄さんは今仮出獄で社会に出てきています。表面的には比較的自由になっていますが、現実には「殺人犯」としてさまざまな遵守事項、規則に縛りつけられ、選挙権さえ認められていないのです。

無実を叫び続けて40年が来ようとしています。取り返すことのできない年月を振り返ってもせん無いことと思いつつも今なお呪縛の中に置かれている一雄さんの無実を叫ぶ日々を見、感じてきた私にとって「棄却」攻撃は身を切られるようにつらいものでした。権力はそんなものと割り切ることはできませんでした。

一雄さんは、あくまでも自分の信念を貫き、身の潔白が明らかになるまで闘いぬく決意でいます。

今の司法権力にそれでも「正義」を求めて私も闘いを進めていきます。

石川早智子

「学び」を求めればキリがありません。以前紹介した「奈良水平社博物館」や「大阪人権博物館リバティおおさか」「岡山渋染一揆資料館」などもその一つです。何かの機会にみなさんも訪れるチャンスがあるかもしれません。その時には、ぜひ「伝えたい思い」を感じてきてください。またチャンスはなくとも、進んで行くことも可能かと思えます。本当の意

味で人権が中心におかれた人づくりが進んでいけば、^あ当たり^{まえ}前のように、こういった場所へ行くことになるでしょう。そんな時代を、私たちの力で早く呼び込もうではありませんか！

〇〇〇 〆〆〆 〆〆〆

- 3月16日(土) 卒業式
- 19日(火) 徳島県公立高校一般入試合格発表
- 22日(金) 離任式・修了式
- 23日(土) 学習会春季一日研修(7:30～19:00 ; 大阪人権博物館「リパティおおさか」など)